

緑の教育

始良・伊佐教育事務所 平成30年12月

緑の自然のごとく あしたをひらく豊かな心
緑の若葉のごとく あしたを創る確かな学力
緑の大樹のごとく あしたを担うたくましい身体



「不登校対策に思う」

指導課長 木原田 雅彦

初任校4年目、私は6年担任だった。2学期始めに東京から男の子が父親の転勤に伴い転入してきた。転入生の受入れにあたり、彼を温かく迎え入れてくれるよう学級の子もたちに話した。次の日は問題なく登校したが、その後、登校しぶりが始まった。母親は、家での状況やこれまでの子育ての状況を申し訳なきように話された。いろいろな対応を取ったが登校はかなわず、結局、あまり刺激を与えず様子を見守ることとなった。彼は中学校へ進学後、しばらくして、東京へ引っ越したと聞いた。

数年後、ある図書館で「学校に行けない子どもは、時代の最先端を生きている」と書かれた短冊が目にとまった。既存のシステムに適応できない、硬直化した旧来の価値観に馴染めない、その時代の矛盾に敏感に反応する、時代の最先端を生きている子ども。そんな解説が添えられていた。ふと初任校での彼を思い出した。転校が引き金になり不登校になった彼。彼を登校させることができない無力感、力量不足を感じながらも、どこかに保護者とその子に責任を転嫁していた当時の自分。短冊の言葉は、親子の苦悩に寄り添っていなかった自分にとって衝撃だった。

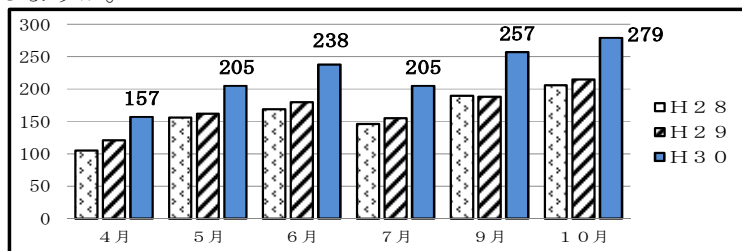
現在、生徒指導に係る月例報告の不登校児童生徒数を見て困窮するたびに、短冊の言葉と共に当時の自分の姿を思い出す。不登校の出現率をみると、中学校の1年時が依然として高い。小学校で増えつつあることも看過できない。中1ギャップは、10歳の壁から始まるとも言われる。不登校の理由も、友人関係、学業不振、親子関係、病気、無気力、情緒的混乱など多様だ。学校の対応も多岐で困難を伴っているが、引き続き子どもの状況に応じた粘り強い対応が求められる。不登校にしないための未然防止の取組も大事である。

学校の対応策を充実させるために、校内（内側）の取組はもちろんであるが、子どもに寄り添い、見守り、支えるいろいろな立場の方（外側）の実践に学ぶことも大切ではなかろうか。

本地区小中学生の現状は～各種調査結果から～

本地区における生徒指導上の課題の一つとして、不登校児童生徒数が増加傾向にあることが挙げられます。グラフは、一月あたり7日以上欠席している児童生徒数の推移を表しており、年度ごと、月ごとに見ても増加していることが分かります。また、表からは、本地区における不登校児童生徒数の在籍率が県の在籍率よりも高くなっています。

この現状を踏まえ、様々な取組を参考にしながら、今後の対応策について考えていくことが必要ではないでしょうか。



【月例報告による不登校児童生徒数の推移】

※ 数値は不登校児童生徒数

		H27	H28	H29
小学校	本 県	0.32	0.34	0.33
	本地区	0.36	0.42	0.5
中学校	本 県	3.22	3.16	3.14
	本地区	3.52	3.77	4.21

【問題行動等調査による不登校児生徒数の在籍率】

※ 在籍率は「不登校児相生徒数÷在籍児童生徒数×100」により算出

児童生徒との関わり方、目指す学校“私たちはこう考える”

不登校に関する事例研究会（開催日：9月5日（水）、参加者数：81名）を実施しました。次に紹介する5人の方々は、研究会におけるパネリストの皆さんです。5人の方々の思いから何を感じ取りますか。

未来を切り開くための私たちの関わり ～保護者・地域の方の声～



伊佐市立菱刈中学校PTA会長
県PTA連合会副会長
谷下 政一 氏



親として、PTA 会長としての顔をもつ谷下氏。日々の生活から感じている子どもと向き合うための秘訣とは。

◇ 成長のサポート

「不登校になりそうだ。」娘が語りかけてきた。私はいろいろと尋ねた。しかし、結局のところ、『聞いてほしかった。』娘はそう思っていたと思う。中学生は多感な時期で、悩みも多い。大きな壁にぶち当たることもある。当然である。そんな時、親が、身近な大人がきちんと向き合う。そんな繰り返しで、子どもを成長させていくのである。

◇ 輪を広げる

子どもをみんなで育てる。そんな考えが重要である。そのためには協力が必要で、先生と保護者、保護者同士の輪を広げたい。話す機会をつくり、会話をする。難しく考えず関わる。すると、人を好きになり、楽しくなっていく。それが輪をつくる秘訣ではないか。



KAGOSHIMA POLICE
スクールサポーター
原口 正人 氏



教師の言葉に力をもらったと語る原口氏。言葉を大切にしたい人との関わり方のポイントとは。

◇ 言葉の力

幼少期、吃音症のため言葉が上手く出てこなかった。そんな時、「無理して話す必要はない、言い換えて話せばいいの。」という先生の言葉が、私に勇気を与え、内気な性格と決別できた。言葉には力がある。このことを胸に留め置き、仕事と毎日向き合っている。

◇ 自問自答の日々

子育てには悩みがつきものである。不登校の児童生徒をもつ親の苦悩は、時に怒りとして表出する。だからこそ私は、「怒らず、焦らず、楽しんで！」と心に余裕をもちながら、一緒になって考える。そして迷った時には、「これは子どものためになるのか。」と自問自答し、決して答えは急がないようにしている。



霧島市教育委員会
学校教育課 SSW
万福 貞子 氏



日頃から聞くことを大切にしている万福氏。信頼関係を築くためにお互いが努力することとは。

◇ 聞くということ

「適切な言葉かけとは……」迷う時が多々ある。だからこそ、相手を知ることが大切にし、その人の考えを自分自身の頭の中でイメージできるまで聞くようにしている。このことが信頼関係の構築に繋がる。このことは、子どもだけでなく、保護者にも当てはまる。

◇ 助けを求め

私自身は万能ではなく、多くの人の助けを借りてきた。今、思うのは、チームが生む大きな力だ。様々な立場の人が関わることで、今までにない角度から解決の糸口が見つかる。また、独りよがりにならないためにも、「助けて」と言うことは必要であり、自分自身の取組を振り返る機会ともなる。

子どもが輝くためにできること ～学校の実践～

湧水町立栗野小学校

満枝 賢治 校長

魅力ある学校づくり

◇ 児童の自己肯定感を高める

児童の自己肯定感を高めることが、不登校対策に繋がるという信念のもと研究を進めている。児童が通いたいという「魅力ある学校」を目指したい。

◇ 「チーム栗野」一丸となって

分かる、できる喜びを共有できる授業の展開、互いに関わり合う喜びを共有できる場や機会の設定、職員と児童との深い信頼関係の構築など、具体的な取組を通して、教職員、保護者、地域が一体となった取組を推進したい。



【学び合いの様子】

始良市立帖佐中学校

鶴園 博文 校長

生徒と教師が紡ぐ学校

◇ 学校の空気

帖佐中学校を愛し、誇りに思っている。生徒と教職員が協同して創ってきた凜とした空気が漂っていることがその一つだ。今後も大切に育みたい。

◇ 生徒を輝かせる

生徒会役員は様々な形で活躍している。今後は、校則などについても生徒自身が考え、決め、守る、そんな自立した生徒を育成したい。一定の成果は出ているが、認め合える集団づくりを更に推し進め、全ての授業で、生徒同士が本音で語り合えるようにしたい。そんな帖佐中を全員で創り上げたい。



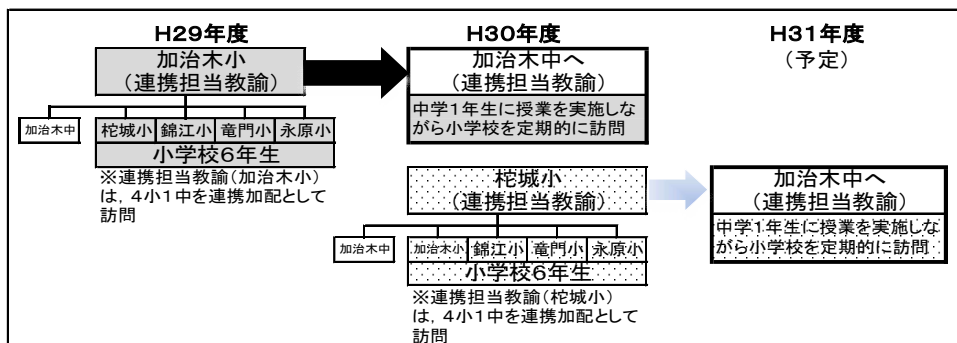
【生徒会による街頭募金】

小中連携による不登校問題への取組

本地区では、一人の連携指導教員が2年間を-spanとして、小中連携を推進しています。本年度は、12人の小中連携加配教員が配置されています。以下に、2つの中学校区での取組を紹介します。

信頼関係づくりを基盤とした小中連携の実践

～H29からH31年度における始良市立加治木中学校区の取組～



【連携担当教諭の役割】
1年目は小学校で連携役を担い、2年目は小学生と一緒に中学校へ籍を移す。一人の教員が複数の学校の児童と触れ合うことで、中1ギャップの解消を目指す。

▼ 授業プラスαの時間の共有

連携担当教諭が児童との信頼関係構築のために工夫したことは、前年度担当者のアドバイスを受け、「給食時間、昼休み、清掃時間」での触れ合いを大切にしたこと。初めて出会う児童との授業以外の時間を共有したことは、話しやすい関係をつくるとともに、授業においても児童が積極的に発言するといった効果もあったとのこと。



【身振り手振り指導する連携担当教諭】

▼ 小中連携記録簿の活用

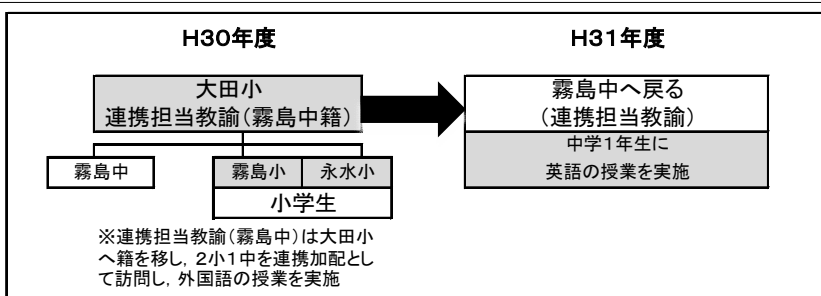
連携担当教諭が作成した「小中連携記録簿」には、生徒の欠席理由や指導内容等が毎日記されている。この記録簿は、管理職や学年部職員に回覧され、情報共有がなされている。その結果、「〇〇さんは、最近どうしたのだろうか。」といった言葉など、生徒への関心とともに、寄り添っていきこうとする雰囲気が高められている。

生徒の様子・活動、欠席理由		担任等の関わり	
氏名	学年	欠席理由	担任等の関わり

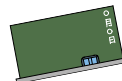
【小中連携記録簿】

外国語指導を主とした小中連携の実践

～H30からH31年度における霧島市立霧島中学校区の取組～



【連携担当教諭の役割】
連携担当教諭は担任と連携し、小規模校における外国語の授業を実践する。外国語を楽しく学ばせることで、外国語学習への関心を高めることを目指す。



▼ 「英語が好き！」—そんな児童を一人でも多く

連携担当教諭は、中学校での指導経験を生かし、児童が興味関心をもって授業に臨むことができるような教材をつくりながら、授業実践を重ねている。また、各小学校で研修を行い、自作教材を用いた具体的な指導方法や理論について、他の先生方に紹介している。英語好きを一人でも多く育むためには、更なる授業改善の必要性を自ら感じ、日々奮闘している。子どもたちの授業の様子からは、その思いが実を結びつつある手応えを感じたとのこと。



【自作教材で学ぶ児童】

研究の軌跡を残す ～平成 30 年度優秀教職員表彰～

11月26日(月)に平成30年度県優秀教職員表彰*が行われ、本地区から6人の先生方が表彰されました。厳粛な雰囲気の中行われた授賞式に参加された皆さんは、その後、グループに分かれ、他地区の受賞者の方々と協議を行い、交流を深めておられました。今後、6人の先生方の取組が先行的な研究実践となるとともに、皆さんがますます御活躍されることを期待しています。本当におめでとうございます。

【始良・伊佐地区受賞者一覧】

受賞者	学校名	分野
鮫島 純二教諭	霧島市立青葉小学校	学習指導
福田 香教諭	伊佐市立羽月西小学校	
高橋 美香教諭	始良市立柁城小学校	
西郷 喜子教諭	湧水町立栗野小学校	
中峯 敦子教諭	霧島市立日当山小学校	生徒指導
神園 章教諭	始良市立重富中学校	部活動



【受賞者の感想】

これまで、素晴らしい先生方やガッツのある教職員集団との出会いの中で学ばせていただき、多くの先生方に支えられての受賞でした。今後も、複式学級の研究を進めつつ、様々な校務分掌の経験を、子どもたちの教育に生かしていきたいと思います。【羽月西小 福田教諭】

* 平成30年度は県内の教職員44人と「教職員組織」として4団体が受賞。

失敗は成功のもと あきらめずに練習する強い心を ～国体に向けて輝く中学生①～

本地区から、17競技44人の生徒がジュニアアスリートとして認定されました。ジュニアアスリートの認定は、「燃ゆる感動かごしま国体」で活躍が期待できる有望なジュニア選手に対して、本県代表候補選手としての意識を高め、競技力向上に対する取組の充実を図ることを趣旨としています。

今回、ジュニアアスリートとして、カヌー競技で活躍している大口中央中学校1年の岡元優彦さんを紹介します。



◆ カヌーを始めた動機と魅力

大口小4年生の時に、母親がスポーツクラブ(菱刈カヌー競技場)に連れて行ってくれたことがきっかけ。漕ぐ練習をしているときに、できなかったことができるようになり、タイムが伸びることが魅力です。



◆ 平成30年度九州カヌージュニア大会兼鹿児島県カヌー大会の結果について

結果は、第3位でした。次回は、第1・2位の選手を抜いて、優勝したいです。

◆ 今後の目標

カナディアンシングル(500m)で、自己記録(2分30秒)を出すことです。

◆ 管内の小・中学生へのメッセージ

「失敗は成功のもと」という言葉があります。カヌーを始めたばかりの時は、たくさん失敗をしますが、あきらめずに練習すると「漕ぎ」や「バランス」が少しずつうまくなって、成功に近づいていきます。うまくなると、とても楽しいスポーツですので、皆さん、カヌーをやってみませんか。一緒に国体を目指しましょう！

編集後記

皆さんは、「One for All All for one」という言葉を知っていますか。

この言葉は、アレクサンダー・デュマが書いた「三銃士」の中で剣を合わせ誓う言葉として広まりました。日本では、80年代半ばに放送され大人気となったドラマ「スクールウォーズ」の中でこの言葉が使われ、荒廃した高校のラグビー部員達が厳しい練習を通して、技術も人間としても成長していく物語だったことから、ラグビーというスポーツの精神を表す言葉や、また教育的な価値のある言葉として定着したように思われます。

ところで、この言葉の後の「one」は、原作の意図としては「Victory」と訳すのが正しいと書物で読んだことがあります。つまり「一人は皆のために、皆は勝利のために」が正しい解釈となります。

「One for All All for one」の意味は「助け合いの精神」ではなく「自立した人間としてチームを支え、勝利を目指す」という意味なのです。

これは、学校に置き換えても意味が通じます。本地区では「チーム学校」による不登校対策の体制整備に取り組んでいるところですが、不登校に限らず「チーム○○」による、例えば学力向上など「ゴール」を目指していただきたいと思っています。

(総務課長 石田 智芳)